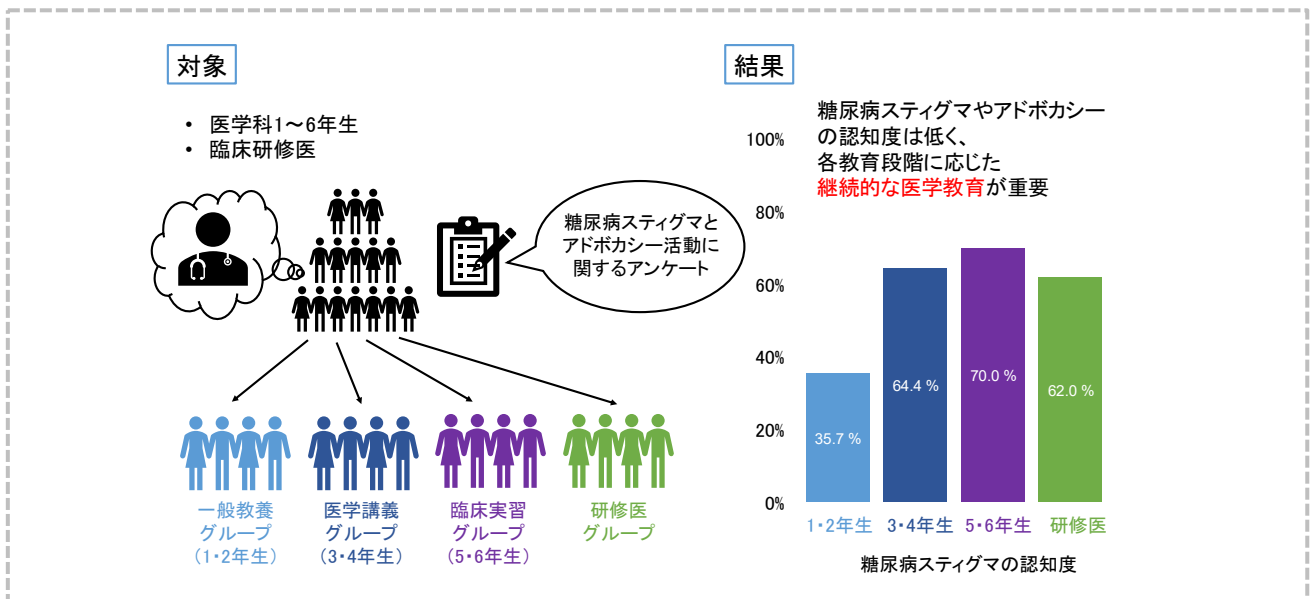


## 未来の医師の糖尿病スティグマの認知と課題 —スティグマ根絶に向けた教育的アプローチ—

### 概要

京都大学大学院医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学 村上隆亮 助教、矢部大介 教授らの研究グループは、同 医学教育・国際化推進センター 片岡仁美 教授、聖マリアンナ医科大学 中村祐太 講師、曽根正勝 教授らと共同で、京都大学・聖マリアンナ医科大学の医学部医学科生と両大学病院の臨床研修医<sup>1</sup>を対象に、糖尿病スティグマ<sup>2</sup>とアドボカシー活動<sup>3</sup>に関する世界初の大規模実態調査を実施しました。将来の医療を担う者の認知の実像を明らかにした世界初の研究成果です。その結果、糖尿病スティグマの認知率は全体の57.0%、アドボカシー活動の認知率は25.9%と低いことが明らかとなりました。糖尿病に関する臨床講義を受ける3・4年生以降で認知度が上昇し、臨床講義の教育効果が示される一方、医療現場での臨床実習を経ても認知度は上昇せず、臨床研修医で「糖尿病をもつ人は食事や運動などの自己管理ができていない」などのスティグマを持っている人が多く、臨床講義以降の医学教育の課題が浮き彫りとなりました。正しい知識を持たずに臨床診療に携わることで糖尿病に対するスティグマを付与するリスクが判明し、各教育段階に応じた継続的な医学教育の重要性が示されました。

本研究成果は、2025年10月10日に、国際学術誌「*Diabetes Research and Clinical Practice (DRCP)*」にオンライン掲載されました。



## 1. 背景

スティグマとは、「負の烙印」を意味し、特定の属性を持つ人に対して否定的な価値を付与することを意味します。これは知識不足や偏見によって生じるものであり、スティグマを受ける側は不当に不利益を被ることになります。糖尿病をもつ人が直面するスティグマには、「糖尿病をもつ人は寿命が短い」「糖尿病は怠惰で無責任な生活の結果である」といった誤解が含まれます。これらの偏見は患者の社会的評価を低下させ、就学、就職、結婚、生命保険や住宅ローンの審査といった重要なライフイベントにおいて不当な扱いを招くことがあります。糖尿病スティグマが放置されると糖尿病をもつ人は自身の疾患を隠そうとし、適切な医療を受ける機会を逃し、結果として合併症の進展や悪化に繋がる可能性があります。そのため、一般社団法人日本糖尿病学会と JADEC（公益社団法人日本糖尿病協会）は、糖尿病の正しい理解を促進する活動を通じて、糖尿病をもつ人が安心して社会生活を送り、人生 100 年時代の日本でいきいきと過ごすことができる社会形成を目指す活動（アドボカシー活動）を 2019 年から開始しています。しかし、糖尿病をもつ人の 5 人に 4 人が糖尿病スティグマを感じているにもかかわらず、社会での糖尿病スティグマの認知度は低いのが現状です。また、糖尿病スティグマは医療者が付与する可能性もあります。糖尿病スティグマのない世界を実現するためには、まずは糖尿病スティグマがあるということを医療者が認識することが重要です。

そこで、村上隆亮 助教、矢部大介 教授ら京都大学の研究チームは中村祐太 講師、曾根正勝 教授らの聖マリアンナ医科大学の研究チームと共同で、未来の医療を担う医学生と臨床研修医における糖尿病スティグマとアドボカシー活動の認知度を含めた世界初の意識調査を行いました。

## 2. 研究手法・成果

本研究は、京都大学医学部医学科、聖マリアンナ医科大学医学部医学科の 1～6 年生 1369 名、京都大学医学部附属病院、聖マリアンナ医科大学病院の臨床研修医 238 名の計 1607 名を対象に、糖尿病スティグマとアドボカシー活動に関するアンケート調査を行い、57.3%にあたる 921 名から回答を得ました。日本の医学教育では、臨床医学の授業が 3 年生以降に開始となり、5 年生以降では実際に臨床現場で臨床実習を行うため、教育段階別に 1・2 年生（一般教養グループ）、3・4 年生（医学講義グループ）、5・6 年生（臨床実習グループ）、臨床研修医の 4 グループに分けて解析を行いました。

その結果、糖尿病スティグマを認識していたのは全体で 57.0%であり、教育段階別で比べると臨床医学の授業を受けていない 1・2 年生では 35.7%と低く、臨床医学の講義を受けた 3・4 年生以降は 60～70%と高くなる傾向がありました。しかし、実際に臨床現場で実習あるいは業務を行っている 5・6 年生と臨床研修医の糖尿病スティグマの認知度が 3・4 年生と同程度であったことから、臨床講義は糖尿病スティグマの認知度向上に一定の効果はあるものの、それ以降の医学教育プログラムに課題があることが分かりました。

さらに、糖尿病をもつ人に対するイメージに関する質問では、約 40%が「糖尿病は遺伝病である」や「糖尿病をもつ人は寿命が短い」といった誤ったイメージを持っており、「糖尿病をもつ人は食事や運動などの自己管理ができていない」といった糖尿病スティグマにつながるイメージをもつ人が臨床研修医で最も多いという結果でした。このことから、糖尿病スティグマを認識していたとしても、糖尿病（ダイアベティス）に関する正しい理解からは程遠く、正しい知識を持たないまま臨床現場に足を踏み入れることで、誤ったイメージが固定化される危険性が高いことが分かりました。

また、糖尿病スティグマを認識している群では自身や医療者がスティグマに寄与する可能性があることを認識していたため、まずは糖尿病スティグマについて認識してもらうことが糖尿病スティグマのない世界の実現には重要であることも分かりました。さらに、Jefferson Scale of Empathy© という共感性の指標となる質問

用紙も用いて解析を行ったところ、糖尿病スティグマを認識している群では、共感性スコアが高かったことから、医学教育を通じて共感力を維持・強化するための介入が必要であることが示唆されました。

以上のことから、医学生および臨床研修医における、糖尿病スティグマとアドボカシーに関する理解は依然として十分ではなく、臨床教育・臨床実習を経ても根強い誤解があることがわかり、糖尿病スティグマの根絶には糖尿病スティグマを体系的に扱うための医学教育カリキュラムの強化が急務であることが明らかとなりました。

### 3. 波及効果、今後の予定

本研究の結果を受け、糖尿病に対するスティグマのない世界の実現に向けて、効果的な医学教育カリキュラムの開発行われることが期待されます。さらに、日本国内だけでなく、アジアを含む西太平洋地域の各国と協力し、同様の研究を行うことで、世界規模で現在の医学教育の効果と課題を明らかにし、効果的な国際医学教育プログラムの開発へ貢献する予定です。

### 4. 研究プロジェクトについて

本研究は、京都大学（承認番号：R4518）、聖マリアンナ医科大学(承認番号：6613)の倫理委員会の承認を得て実施されました。

・共同研究グループ

京都大学大学院医学研究科 糖尿病・内分泌・栄養内科学

博士課程学生 松城真里（マツシロ・マリ）

博士課程学生 本橋和也（モトハシ・カズヤ）

助教 村上隆亮（ムラカミ・タカアキ）

教授 矢部大介（ヤベ・ダイスケ）

聖マリアンナ医科大学

診療助手 内山修太郎（ウチヤマ・シュウタロウ）

講師 中村祐太（ナカムラ・ユウタ）

教授 曾根正勝（ソネ・マサカツ）

京都大学医学研究科 医学教育・国際化推進センター

准教授 三好智子（ミヨシ・トモコ）

教授 片岡仁美（カタオカ・ヒトミ）

Baker Heart and Diabetes Institute

Professor Alicia J Jenkins（アリシア・J・ジェンキンス）

#### <用語解説>

1. **臨床研修医**：日本では、医師国家試験を合格し医師免許証を取得した後に、医師として必要な診療技能を身につけるために、内科、外科など様々な診療科で二年間かけて臨床研修を行います。その臨床研修を受けている医師のことを臨床研修医といいます。
2. **糖尿病スティグマ**：スティグマとは、「負の烙印」を意味し、特定の属性を持つ人に対して否定的な価値を付与することを意味します。社会における糖尿病についての知識不足や誤ったイメージにより糖尿病をもつ人は糖尿病スティグマ（社会的偏見による差別）に直面しています。スティグマを放置すると、糖尿病をもつ人

は自身が糖尿病であることを周囲に隠し、適切な医療を受ける機会を失い、合併症が進行するなど重症化のリスクが高くなります。これにより医療費が増加し社会保障が脅かされるため糖尿病をもつ人だけでなく社会全体にさまざまな問題を引き起こします。そのため糖尿病に対するスティグマをなくし、糖尿病をもつ人が安心して社会生活を送れる世の中にすることが必要です。

3. **アドボカシー活動**：不公平な社会を変えるために、一人一人が問題について知り、解決のためにできることを訴えていくことをアドボカシーと言います。日本糖尿病学会と JADEC(日本糖尿病協会)は、糖尿病の正しい理解を促進する活動を通して、糖尿病をもつ人が安心して社会生活を過ごすことができる社会形成を目指す活動、すなわちアドボカシー活動を 2019 年から開始しています。「糖尿病」という呼称を不快に感じている人たちがいることを受け、「ダイアベティス」を呼称変更の第一候補として、市民や行政、医療者など多くのステークホルダーと意見交換を行いながら、疾病に対する正しい知識の普及啓発を行っています。IDF (International Diabetes Federation) と WHO (World Health Organization) の働きかけによる国連 (UN、United Nation) 決議により公式認定された「World Diabetes Day」(毎年 11 月 14 日、インスリンの発見者 Sir Frederick Banting の誕生日) も疾病に対する正しい知識を普及すべく世界各地でブルーライト・アップや市民講座などのイベントが開催されています。

#### <論文タイトルと著者>

タイトル：Awareness of Diabetes Stigma and Advocacy Among Future Physicians: Insights from the First Real-World Survey among Medical Trainees in Japan (未来の医師に対する糖尿病スティグマとアドボカシー活動の意識調査：日本の医学生と研修医を対象とした世界初の調査からの知見)

著者：Mari Matsushiro, Kazuya Motohashi, Takaaki Murakami, Shutaro Uchiyama, Yuta Nakamura, Hayao Yoshida, Kentro Sakaki, Yamato Keidai, Naoki Wada, Daisuke Taura, Eri Ikeguchi, Masakatsu Sone, Tomoko Miyoshi, Hitomi Kataoka, Alicia Josephine Jenkins, Daisuke Yabe.

掲載誌：*Diabetes Research and Clinical Practice (DRCP)*

DOI：<https://doi.org/10.1016/j.diabres.2025.112937>